

たろばな 京都大学男女共同参画推進センター Gender Equality Promotion Center

女子高生・車座フォーラム 2019

12月22日(日) 国際科学イノベーション棟シンポジウムホール等にて「女子高生・車座フォーラム2019」を開催しました。このフォーラムは、男女共同参画推進センターが中心となり、女子高生に京都大学での学生生活や研究者の仕事を知ってもらおうという企画です。今年で14回目の開催となり、高校生111名、保護者49名の参加がありました。



今村 博臣男女共同参画推進センター広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ主査の司会進行のもと、はじめに、稲葉 カヨセンター長、理事・副学長より開会の挨拶と京都大学についての紹介がありました。稲葉センター長は、京都大学の歴史やミッション、特色入試等、京都大学について話しました。その中でもWINDOW構想については、「最後のWには、女性をサポートし、女性がより伸びるような教育をしていくという意味が込められています。」と述べ、男女共同参画のこれまでの流れや男女共同参画推進センターの取り組みについて紹介しました。最後は、「どうぞ京大に来てください。また皆さんと京大でお会いできることを楽しみにしています。」と締めくくりました。



引き続き、人文科学研究所の石井 美保准教授が「フィールドワーカーになろう!」の題で講演を行いました。石井准教授は、フィールドワークの意義や素晴らしさについて話し、ガーナでの調査では「人々のいきいきとした生活を見ることができました。フィールドへの没入と再帰を繰り返していく中で、自分が変わり、成長していきます。回り道に見えることでも無駄ではなく、研究の発想に生かされます。」と述べました。また自身の子どもを連れて村を訪問したり、子どもにヘルメットやマスクを付けて過ごしたりしたことなど、2人の子連れフィールドワークのエピソードについても話し、最後に「あらゆる場面で女子学生が活躍しています。高校生の皆さんには、希望を持って進んでほしいと思います。」と激励しました。

次に、総合人間学部卒業の舟橋 知生さんと理学部の学生達がおもろいチャレンジの取り組みについて紹介をしました。舟橋さんは、「バクタブルに訪問した際、宗教意匠に興味を持ち、研究したい!と思いました。周りが



応援してくれる恵まれた環境で取り組むことができ、想像以上におもしろい発見ができました。」とおもろいチャレンジでネパール・バクタブルでの建築意匠調査に取り組んだきっかけやエピソードなどについて話しました。最後には、「自分の夢に向かって今何をしなければいけないか考え、コツコツ取り組むと可能性は広がります。志を絶やさず頑張ってください。」と高校生にメッセージを送りました。また理学部の学生は、「4人でアラスカへと旅立ち、オーロラの音かもしれないものを発見しました。思ったより素晴らしい成果を得た。」とオーロラの音をテーマに調査したことについて紹介しました。また「女子率が低くて心配だったが、今ではとても居心地のいい場所となっています。」「3回生から専門分野を決められるので、何がやりたいかはっきりしていなくても大丈夫。ぜひ理学部を目指してほしいです。」とそれぞれの京大理学部を選んだ理由について話しました。



昼休憩後、高校生は希望学部別のグループに分かれ、総合研究8号館に移動し、グループワークを行いました。事前に集めた質問内容をもとに、学生は受験勉強や学生生活といった実体験を語り、研究生活や専門などについては講師が回答しました。質疑応答以外にも活発な意見交換が行われ、非常に内容の充実したグループワークとなりました。



高校生がグループワークに参加している間、保護者は京都大学学生との交流会に参加しました。稲葉 カヨセンター長挨拶の後、保護者から学生へ学校生活や学部などについて疑問に思うことを数々の質問があり、学生が回答しました。

グループワーク終了後は再び全員で集まり、まとめの会を行いました。足立 壯一男女共同参画推進本部支援室長の司会進行で、それぞれのグループで話し合った内容を報告し、他のグループでの話し合いについて情報共有しました。

車座フォーラム閉会後も、入試企画課と学生が残り、女子高生からの質問に丁寧に対応しました。

今年度のアンケートや車座フォーラムの詳細内容は、HPに掲載していますのでご覧ください。



グループワークの様子



文学部



教育学部



法学部



経済学部



理学部



医学部（医学）



医学部（人間健康科学）



薬学部



工学部



農学部



総合人間学部（文系）



総合人間学部（理系）



保護者（京大生との交流）

車座フォーラム参加者の声（保護者・高校生のアンケートより）※一部抜粋

- ・自分の進路について考え直すきっかけになり、選択の幅が広がったのはよかったです。
- ・京都大学の女性研究者への支援が厚いと感じました。研究者という進路も視野に入れて頑張ります。

- ・オーロラのおもしろチャレンジの話が印象的で、京大の自由さがよくわかりました。女子大学生のお話が身近で分かりやすくよかったです。漠然と目指していた京大が、未来の自分が過ごしたい、輝きたい場所として想像できるようになりました。
- ・他の学校、地域の普段なら関われない人たちと交流することができて、とても刺激を受けました。京都大学でははじめからどの科目を学ぶかを選択するというのではなく、3年生になってから選べるという点が、自分の進路に焦ることなく、ゆったりと決めることができると安心しました。
- ・学生さんの話もたくさん聞くことができ、京都大学を近くに感じることができました。先生のお話を聞いて、女性が子育てをしながらそんな風に仕事をする道があるのかと、自分の今までの考え方が変わりました。大変だと思うが、自分のやりたいことをするのは生きていくうえでとても大切だと思います。
- ・2年連続参加させて頂きました。「京大に絶対に入りたい！」と意志は固まったようなので、車座フォーラムに感謝です。

令和2年度第1期 研究・実験補助者雇用制度 利用者決定

令和2年度第1期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、12名（女性8名、男性4名）の方に決まりました。

研究・実験補助者雇用制度とは育児・介護等で十分な研究・実験時間がとれない研究者に対し、研究又は実験業務（注：事務及び教育関係の業務は支援対象外）を補助する者の雇用経費を負担するものです。募集は、年2回です。本事業は女性研究者に限らず、男性研究者も対象となります。また、研究分野の文系・理系は問いません。補助者未定でも申請できます。

2019年度 ワーキンググループ活動報告

広報・相談・社会連携事業WG

主査 今村 博臣

広報事業では、3月3日に Women and the World フォーラム6「総長と語る！京大らしさと diversity & inclusion」を女性教員懇話会との共催で行い、総長との意見交流を行いました。また、センターの活動について、ウェブサイトやweb ニュースレター「たちばな」、研究者紹介の冊子「未来に繋がる 青いリボンのエトセトラ」、卒業生紹介の冊子「Will」を通して、学内外に広報活動を行いました。

社会連携事業としては、京都大学主催で関西の他大学と連携し、第15回女子中高生のための関西科学塾を開催しました。京都大学においては、11月10日に様々な分野のグループに分かれて実験を実施しました。また、12月22日には女子高生・車座フォーラム2019を学内にて開催しました。両イベントとも多数の高校生および保護者にご参加いただきました。将来を担う次世代の女性たちに、早い段階から大学の雰囲気に触れ、教員や学生と交流する機会を提供することができたと考えています。

こうした従来への活動に加え、今年度は新たな取り組みとして男女共同参画センターの基金を立ち上げました。

育児・介護支援事業 WG

主査 矢野 孝次

当WGでは京都大学構成員の育児と介護に関する支援活動を行っています。

今年度も4月に男女共同参画推進センター内に待機乳児保育室を開室いたしました。ここでは京都大学の学生・研究者を対象として、認可保育所に入所できなかった生後15ヶ月未満のお子さんをお預かりしています。近年京都市に認可保育所が相次いで開設されていますが、依然として年度途中での保育所入所は厳しいもようので、保育室の利用申請者数は2月の時点で定員18名に達しました。

新たな支援の可能性を模索すべく、情報の発信と収集を促進するため、ニュースレターたちばなへのコラム掲載を継続していますが、今年度は5本の記事を掲載しました。また、保活（子どもを保育園に入園させるための活動）の支援活動として、保活情報交換会を開催しました。

病児保育事業 WG

主査 丹羽 房子

京都大学男女共同参画推進センター・病児保育室「こもも」（以下、病児保育室）は、京都大学に在籍する全

ての教職員・学生の子供（生後6ヶ月から小学校6年生※2019年4月から年齢上限引き上げ）を対象とし、急な疾病により保育園／幼稚園、小学校などに通うことの出来ない病中病後児の保育を行っています。事前登録制による運用で、登録者数はのべ1206名、うち令和元年度の新規登録者93名（令和元年12月末現在）と毎年100名前後の新たな登録があります。定員は5名（感染隔離室1名を含む）であり、令和元年度は751名の利用がありました（令和元年12月末現在）。利用状況は感染症の流行に大きく左右されており、定員を上回る利用希望のために断わらざるを得ない日が続くこともしばしばみられますが、利用者からは概ね良いご意見をいただいています。また、今年度も京大病院オープンホスピタルでのポスター掲示やホームページ等を通じての広報活動も継続して行いました。

定期的な利用者へのアンケート調査や要望を受けて、利用基準についての見直しを随時行っており、利用者からはより利用しやすくなったという声をいただいています。感染対策上困難な点もありますが、京都大学医学部附属病院感染制御部の協力のもと、京都大学教職員・学生が育児を行いつつ、仕事や学業を継続することの可能な環境を実現するため、今後も引き続きよりよい運営方法を検討する必要があると考えています。3月より病児保育室の閉室時間が19時から18時に変更になりますのでご注意ください。

就労支援事業 WG

主査 喜多 恵子

本WGの主要活動である「研究・実験補助者雇用制度」については、育児や介護期にある研究者の研究継続支援という目的に即して、アンケートなどに示される利用者の声も考慮しながら、毎年、少しずつ改良を加えてきています。本年度中の実績は、第1期で応募者27名、利用者14名、第2期で応募者25名、利用者11名と、時期により変動はあるものの、ここ数年増加傾向にあります。予算の制約のなかで、応募者が困難な状況にあることがわかりながら十分な支援ができないケースも増えてきています。また、ここ数回の傾向として、特任教員・研究員など比較的短い任期で京都大学に所属している研究者、特に外国人研究者からの応募が増加しています。不安定な雇用、慣れない土地、家族からの援助も望めない、という状況のなかで育児や介護と研究の両立に苦慮されている男女研究者も多くみられます。

雇用形態の変化や教員のダイバーシティ拡大に適応した制度とその運用の見直しも、制度全体の拡充とともに今後の課題です。

3月より病児保育室閉室時間が19:00より18:00に変更となります。

連載：研究者になる！—第16回—

人間・環境学研究科・教授 山村 亜希

●歴史も地理も大好き。自分にぴったりの歴史地理学。

山に囲まれた中国山地の盆地で育ちました。子どもの頃から知らない土地を「探検」し、その経験をもとに頭の中で地図を作ることが大好きでした。その一方で、学校の科目として好きだったのが歴史でした。身体と頭は地理ですが、気持ちは歴史という感じでしょうか。どちらかを高校生の時点で選べなかった私が、入学後に専門を選べることから志望したのが京大の文学部でした。

受験勉強に苦勞して入った京大なのに、人間関係に当初は慣れませんでした。特に要領良く単位を取ることを自慢し、雑学王のように知識や読書量をひけらかす京大生の一部の文化に馴染めず、悩みました。そんな中、1回生の時に履修した、当時の人気授業の一つの「人文地理学」が唯一の救いでした。それは、先生の研究を基に組み立てられた歴史地理の授業で、研究とは何かを実感できる授業でした。独創的な研究者の知的営為には鳥肌が立つほどの面白さがありました。そこで、地理と歴史のどちらかを選ぶのではなく、どちらもできる歴史地理学があることを知って、京大に来てよかったと思いました。

●研究の苦しさ、覚悟と喜び

卒論は、著名な歴史都市であるにも関わらず、歴史地理学的研究はなされておらず、当時の研究の盲点であった鎌倉をテーマにしました。膨大な中世の記録を読み、発掘調査のデータを一つ一つ確認しながらも、それがどんな成果に結びつくのか分からず、今一つ気乗りしない作業でした。ただ、卒論提出前の最後の詰めで、無駄かも知れないと思っていた「点」と「点」の情報が繋がって、階段を駆け上がっていくような思考の上昇を経験しました。

しかし、その後の修論はとにかく苦しいだけで、出来は惨憺たるものでした。卒論はビギナーズラックだったと思い知りました。結果的に、博士1年次に、一から調査し直して、修論を一字から全て書き直したときに、卒論と同じ一筋の光明が見えました。プライドを捨てての修論の完全な書き直しは、相当の覚悟と労力が必要でした。しかし、この経験がその後に、失敗しても諦めない、再挑戦するという姿勢を作ってくれたので、無駄な経験ではなかったと確信しています。

●フィールドの力、過程を楽しむ心

日本の地域には歴史地理的な個性・特性があり、その土地ならではの魅力があります。研究では、その場所で歴史地理の痕跡を自ら確認し、頭の中の地図を作る

フィールドワーク（巡検）を重視しています。一見しただけでは歴史的景観が全く見えない場所であっても、頭の中に作られる今と過去を結ぶ地図の断片は必ず研究のヒントになります。自分の目で見て、聞いて、感じて学ぶ巡検は、常に新しい発見に満ちています。特に学生達とともにわいわいと勝手な推論を交わしながらの各地の巡検は、私自身も本当に楽しいです。

研究は成果ではなく、過程だと思っています。私は要領が悪い上に、過程を楽しむ気質が強くて、喫緊の論文に直接結びつかないことが薄々分かっているにもかかわらず、まずは着手します。最初にうじうじ悩むよりも、たとえ無駄になっても前進する姿勢だけは、指導教員に褒められました（笑）。そして、往々にして締め切りまでの時間が不足する、焦る、失敗するという結果になることに。ただ、その時は使えなかった情報や知識も自分の血となり肉となって、必ず後から自分に戻ってくるので、過程を楽しむ心はやめられません。

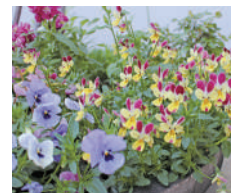
●バランスを取ることの難しさ

最近、介護が必要な高齢の母に時間を割くことが多くなりました。母という時間は自分の存在意義をそこで感じ、もっと時間を割きたいと思います。一方で、研究は確かに好きなことではありますが、反面、追い詰められた時の逃げ場のなさは苦しいです。研究とそれ以外の生活とのバランスの悪さは、今でも解消できていません。

そんなときに思い出すのは、学生時代の「人文地理学」の高揚感です。あの時の私のようなキラキラした目で今の私の授業を受けてくれる学生達や、一緒に行ったフィールドで盛り上がる学生達を見ると、地理学の面白さ・意義を大学という場で伝えることの励みになります。研究のみならず、人生に無駄な経験は一つもありません。目の前の人とともに真摯に向き合うことを、日々心がけたいと思っています。

編集後記

3月は年度末で待機乳児は退所となり、4月に顔ぶれが一新します。少し寂しさもありますが、春の新しい出会いにワクワクしています。センター玄関横の花たちもきれいに咲き始め、みなさんを出迎えます。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/